

識者談話



今回の乳幼児調査では1歳の母親の就労率の高さ、父親の長時間労働など、家族が生活を営み、子どもを育てるには非常に厳しい労働環境にあることがはつきりと見えた。乳幼児期は他者への信頼や希望を育み、人間形成の核になる時期だ。子どもはどの時期も大切だが、この時期に親が仕

加藤 彰彦さん 沖縄大学名誉教授
(調査学識協力者)

根本に親の労働問題

事に追われて子どもに十分関わることができないことの影響は、他の時期よりも一層大きい。この時期に対策ができれば、小学校、中学校と上がるにつれて差は拡大してしまう。

乳幼児期は特に親が土日や深夜まで働かなくてもいいよう育児保障をするべきだ。低所得世帯は非正規労働が多く、仕事を休んでも必要な育児資金が保証される制度を作らなければならぬ。何より働いて家族の生活を支えるだけの収入を得られることが必要だ。

3年間かけて乳幼児期、

学童期、中高生期を調査してきたが、どの世代にも共通し、根本にあるのは親の雇用・労働の問題だ。県はさまざま取り組みを進めているが、労働の面は弱い。労働部局も一緒に総合的な対策を立てなければ、貧困問題は解決しない。

いろんな人と出会い、経験をすることで子どもたちは憧れや将来への希望を持ち、それが生きる力になる。その機会を奪う貧困の改善へ、雇用を含めて改めて幅広い体制を取り、対策を考えてほしい。

(児童福祉論)